



北国の暮らしと ジャガイモ

主婦 渡辺 貞子

1. 元気に育つ作物たち

春5月、北国の十勝にも遅い春が訪れ、厳しく長い冬の間凍った土の中でじっと耐えていた野の草花は、柔かく新しい芽を一斉に伸ばしはじめます。まだ葉が開ききっていない木立ちの陰や畑の片隅に、また道の両わきに、タンポポ、スマレ、クローバなどがかわいいつぼみを持ち上げる頃、広い畑ではトラクターが植付作業に忙しく働らきはじめます。やがて6月も終り7月に入ると、ついせんだってまで土肌もあらわであった畑は、元気に育つ作物でびっしりと覆われますが、なかでも紫色また白色のまるいカンザシのような花を、いっぱい背伸びして咲かせるジャガイモの畑は、まるでじゅうたんを敷きつめたようでその美しさはたとえようもなく、この地に生まれ育ってよかったと、喜びをしみじみとかみしめます。この美しさがもう少し続いてくればよいのに、と思いながらも、作物はさんと照りそそぐ太陽と、時折注ぐおだやかな雨の恵みを受けてひたすらに実りへの道を進みます。百花の咲き乱れる北国の夏はほんとうに短かく、あっという間に通り過ぎますが、それを知っている作物はふたたび寒さがやってくる前に、その生命を全うさせようと急ぐのでしょう。

短かい花の季節が去りゆくのを惜しみながらも、稔りの秋はまた、私たちに大きな喜びを与えてくれます。この頃各地で催される収穫を祝うイベントは、非農家の私たちにとっ

ては土の香りに接して、自然の恵みにあずかる喜びを味わい楽しむことのできるひとときです。今年も順調に移り過ぎ、素晴らしい大地の稔りがもたらされることを祈っています。

2. ジャガイモに助けられた戦中戦後

ムギ、ビート、トウモロコシ、ダイズ、アズキ、野菜類など、数ある十勝の農産物のなかでも、とりわけジャガイモには深い愛着を感じます。思えばジャガイモとはほんとうに長いつき合いです。日華事変から太平洋戦争へと戦線が広がっていった小学生の頃は、日に日に物資が乏しくなってゆきましたが、とりわけ食べ物は不足し、今の飽食の時代では考えられないような、おコメをはじめとする主食はすべて統制され、僅かな量の配給で過さなければならず、とくに育ち盛りの子供たちは可哀そうな思いをしました。そんななかであっても、有難いことに十勝では豊かな農産物に恵まれたため、ぜいたくさえ言わなければそれ程惨めな思いをしないで過すことができました。

町中の多くの家庭では、慣れない手つきで庭を掘り起してトウモロコシや豆を植えたり、屋根にカボチャを這わせたりし、幸運にも農家の畑の一隅を借りられた家では、馬で耕した畑に豆や野菜を播いたりしました。多くはじめての体験で、掌にマメをこしらえたり、曲った腰をさすりさすり伸ばしたり苦労を重ねましたが、それでも自然は秋に豊かな稔りをもたらせてくれます。

不足していたお砂糖の代用に、ビートを薄く輪切りにして煮詰め、蜜をつくった家庭もありましたが、うす甘くてホクホクして、お腹の足しになるカボチャはどこの家でも沢山植えました。ふかしたり煮たりして主食の代用となりましたが、皮の一部分が傷んでいると貯えているときに腐ってしまったり、たとえば新聞紙に包んで上手に囲っても、普通の家庭では年末まで保たせるのが精一杯でした。その点ジャガイモは強い寒さに遭わすことができれば、安心して長い間貯えることができ、飽きがくることなく食べ続けられ、何と有難い食べ物だろうと思いました。

短かい十勝の夏が終りかける頃には畑のジャガイモもまるまると太っています。籠を背負ったり自転車に箱とくわをしぱりつけて掘りにゆくのは、まだ小さかった私たちにとっては決して楽な仕事ではなかったものの、一つの楽しみでもありました。あんまり早い時期にたくさん掘ってしまったら、あとで食べる分がなくなってしまうのか、など心配しながら掘ったものです。

当時は皮つきのまま、また皮の一部をくるりと剥いてゆで、煮上る頃に塩をほんのつまみ入れたものを、息を吹きかけて冷ましながら食べたり、ダイコン・ニンジンなどの野菜といっしょに煮て、塩味またはみそ味のお汁にしたりするなど、たいへん素朴な味わい方でしたが、それでもお腹いっぱい食べられることがほ

んとうに有難いと思っていました。

3. 農村風景のうつりかわり

日ごとに暖かさを感じ、家の北側を残して雪もほとんど融ける頃、荷車をひく母馬の傍らに生まれて日の浅い子馬がつれ添って歩く姿が町に見られると、十勝にも春が訪れたとの実感が湧いたものでした。

やがて高度成長時代となり、農村風景も次第に変わってゆきます。子供の頃から見慣れて親しんできた、長い筒を用いての種まき、長い柄のホークを使つての干草の積み上げ、鎌での麦刈りなど、なつかしい農作業風景が失われてゆき、それらに変わって畑ではいろいろな種類の農機具をつけたトラクターが、いつも忙がしそうに働いています。2頭の馬が曳く機械で掘取られたジャガイモも、いつしかトラクターで掘り上げ人手で集められ、そののちハーベスターとよぶ、掘り上げからいも集めまでを1台で済ませる作業機で収穫されるようになり、作物に人の手が触れることが少なく、なにか私どもから遠ざかってゆく



▲楽しいジャガイモ掘り

ようで、少々淋しく感傷的になってしましますが、きびしい競争の世の中で勝ち残ってゆくには、農業も合理化が必要となってゆくのでしょう。

十勝では、明るく未来のある農業を目指して努力する人々、団体などについての記事が新聞に載ることが多く、直接農業に携わらない私たちの関心を高めてくれています。とくに昨年（平成9年）は豊作で、消費者にとって喜ばしいことが、生産される方々の側に立つと値崩れが心配されるとのことで、認識を改めさせられました。そのほか、健康な食材を供給するために無農薬栽培を工夫する人たちのこと、最近国立のジャガイモ研究所が十勝に移ってきて、新しい種類をつくり出す努力がされていること、その一つとして栗によく似た味の品種が間もなく世の中に送り出されること、などジャガイモについての話題も多くとりあげられています。農業地に住んでいて身の廻りにジャガイモがあるのがあたりまえ、そしてジャガイモといえば全部「だんしゃく」と考えていた私どもにとっては、この分野も日進月歩で、新しい技術でよい品種をつくる仕事が進められていること、作物の栽培法も常に改良が加えられていること、よい種いもをつくるのはたいへん難しいこと、日本全国のフルシーズンを北海道産のジャガイモでまかなえるような、供給のシステムが整えられつつあること、などを知りました。

4. 心はずませてジャガイモを掘る

十勝では、秋の収穫時期に、各地で農に携わる方々に感謝しつつ収穫を喜び、秋の味覚を存分に楽しむイベントが催されます。農業がいちばん身近に感じられるひとときでもあります。

各市町村がそれぞれ工夫し、特色を出して計画する産業祭りなどの催しには数千人ときには万を超す人が集まりますが、この頃はたいてい天候に恵まれ、青空のもと秋風に吹かれ、皆生き生きとしています。

ある町の農業祭では、例年ジャガイモ掘りがあります。このときには私の家でも全員で出かけますが、会場には500～600人以上が集まり、おじいさんおばあさん、おとうさんおかあさん、それに子供たちの三世代世帯、また親子連れが多く見られます。慣れた人は枯れた茎の大きさを見ただけで、どのくらい出来ているかおおよその見当がつくそうですが、素人はいったいどのくらいできているだろうかと、期待に胸をはずませながら掘りはじめます。表面がサラサラと乾いた土にスコップを入れて、グッと一息に起すときに、土の間にチラリと淡黄色のいもの肌がのぞきますが、たまらない喜びと感激を味わう一瞬です。全部の株を掘り上げ、いもを集め終ったときに空を仰ぐと、白い綿雲が西から東に流れ、ややひんやりと乾いた秋風が頬をなでてゆきますが、自然に触れたよこびをもっとも強く感じる時です。

5. 農業祭の主役たち

いろいろな種類の農産物・畜産物がイベントに出品されます。箱入り、袋入りのメークイン、丸いだんしゃくいも、十勝名産の金時・うずら・^{てぼ}手亡などの豆、もぎたてのトウモロコシ、青黒い皮がみるからに堅そうな完熟したカボチャ、それに野菜類、牛乳、アイスクリームなど、どれもおいしそうでつい手が出てしまいますが、大勢の人が箱をいくつも買いこんでゆきます。友人・親戚に送ってあげるのでしょうか。また長い冬を過すための越冬

用なのでしょう。

売られる品は生鮮品とは限りません。とくに最近ではいくつかの農協でジャガイモ、カボチャ、豆などを使っての新らしい加工品の製造に力を入れています。カレーのレトルト製品、現代風に調味されたパック詰めのジャガイモ、粉末カボチャのスープ、干しそば、煮豆のパック、などなどで、たくさんとれる産物を無駄なく長い期間、しかも手軽に消費できるように工夫されていて、日常が忙がしい人たちにとっては便利で有難いことです。農村の繁栄の面からも望ましいことですが、一面ではジャガイモやカボチャといっしょに厳しい暮らしを強いられてきた、戦中戦後の世代にとっては、一個一個を手にとって皮を剥くときの気持ちの安らぎも忘れることはできません。

屋台のお店、試食会はいつも大にぎわいです。ところによっては大きな鉄板で焼いた牛肉を、これまた大きな庖丁で切り、カップに注がれたワインを陽にすかして色を楽しみながら味わうコーナーもあり、しばらくたての牛乳でつくったおいしいアイスクリーム、蒸したり焼いたりした、よい香りをただよわせるトウモロコシ、湯気の立つ塩ゆでジャガイモ、うどん・そばのコーナーなど、どこも黒山の人ばかりです。

ふだんは何気なく食べているものも、青空の下、大勢でワイワイガヤガヤと賑わう会場で楽しく語らいながらの味は格別で、思わずおかわりをしてしまいます。

このような催しは、十勝、北海道ばかりでなく、全国の多くの地域でも開かれていて、そのやり方に工夫がこらされ、毎年行われているものですが少しづつ新らしい企画が加え

られてゆき、その面でも楽しみがあります。

しかし農村は、やはり農畜産物を産み出す場ですので、大きな都会で計画されるような豪華なものではなくても、自然と共存した素朴さが失われることなく続けてもらえれば、と願っています。

作物はかけ足で育ってゆき、春から夏、そして秋へと季節もアツという間に移り、待ちこがれた祭り、催しが終われば長い冬がすぐ迫ってきます。暖かい地方の方々には想像も及ばない寒さですが、それが厳しい分、天はそこに暮らす人たちにごほうびとして豊かな自然の恵みをもたらしてくれるでしょう。北国の人たちは今日も元気に、希望をもって足を踏みしめ大地に立っています。

編集後記 木造のいなかの駅舎に今年もツバメが渡ってきました。せっせと餌を運ぶ涙ぐましい親鳥の愛を受け、またじっと見上げるおとしより、汚れを気にせず掃除する駅員さんなど優しい人たちに見守られながら育ったヒナは、もう親と変わらないくらいの大きさです。ふしぎな習性をもつ渡り鳥、やがて秋になりもどってゆく南の国でも変わらない自然と温かい心の人たちに迎えられ、おだやかに過してもらいたいと願わずにはおられません。

いも類振興情報 第56号

平成10年7月15日発行

発行所 財団法人 いも類振興会
東京都港区赤坂6-10-41
ウィップ赤坂303号室
電話 03-3588-1040
FAX 03-3588-1225
振替 00130-1-110152
印刷所 JTB印刷株式会社